

主 論 文 要 旨

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	辻 貴 之
主 論 文 題 名 Safety and Efficacy of Conversion Therapy After Systemic Chemotherapy in Advanced Esophageal Cancer with Distant Metastases: A Multicenter Retrospective Observational Study (遠隔転移を有する食道癌におけるコンバージョン治療の安全性と有効性に関する多施設共同研究)				
(内 容 の 要 旨) 遠隔転移を伴う食道扁平上皮癌 (esophageal squamous cell carcinoma : ESCC) 患者に対しては、これまで全身化学療法が主な治療法とされてきた。しかし、近年の集学的治療の進歩により、根治が難しいとされる症例においても、コンバージョン療法 (conversion therapy) が治療選択肢として注目されている。本研究では、遠隔転移を有するESCC患者を対象に、コンバージョン療法の安全性および有効性を評価した。 22施設から収集された147例が対象となり、全例に初期治療として全身化学療法が施行された。最も多かったM1因子は傍大動脈リンパ節 (para-aortic lymph node) で、全体の55%を占めた。初期治療後、116例が手術を、31例が化学放射線療法 (chemoradiotherapy : CRT) を受けた。手術後の主な合併症には肺炎 (16%)、縫合不全 (7%)、反回神経麻痺 (recurrent laryngeal nerve palsy : RLNP, 6%) が認められた。一方、CRTでは18%にグレード3以上の非血液学的毒性が発生した。 5年全生存率 (overall survival : OS) は31.7%で、病理学的奏効 (pathological response) が認められた患者は非奏効例に比べて有意にOSが延長していた (ハザード比 0.493, $p = 0.012$)。一方で、遠隔転移の分布、レジメンの種類、臨床効果、コンバージョン療法の種類はOSに有意な影響を及ぼさなかった。 本研究の結果は、遠隔転移を伴うESCCに対するコンバージョン療法が安全に実施可能であり、病理学的奏効が予後改善に寄与する可能性を示唆している。この治療戦略は、従来の化学療法のみでは根治が困難であった症例に対し、新たな治療の方向性を提供するものである。				